

O-68 当院における急速進行性間質性肺炎および慢性間質性肺炎急性増悪に対する PMX 療法の使用経験

公立陶生病院 呼吸器・アレルギー内科
麻生 裕紀、片岡 健介、加藤 景介、西山 理、
木村 智樹、近藤 康博、谷口 博之

【背景】

PMX (Polymyxin B-immobilized fiber column) 療法は血中エンドトキシンを吸着し敗血症の治療法として開発されたが、ALI/ARDS に対する有用性が報告されており間質性肺炎の急性増悪に対しても試みられている。今回、当院における原因不明の急速進行性間質性肺炎ならびに間質性肺炎の急性増悪に対する PMX 療法につき retrospective に検討した。

【目的】

急速進行性間質性肺炎ならびに慢性間質性肺炎急性増悪に対する PMX 療法の効果につき検討する。

【対象と方法】

2006 年 7 月から 2007 年 5 月までの間に当院にて入院した原因不明の急速進行性間質性肺炎ならびに慢性間質性肺炎急性増悪症例 12 例。PMX 療法は血流量を 80-100ml/min とし体外循環量を 6 時間として 2 日間施行した。

【結果】

対象症例 12 例は、男性 11 例・女性 1 例、平均年齢 67.6 ± 8.0 歳で、PMX 療法施行時の $\text{PaO}_2/\text{FiO}_2$ ratio は 169.3 ± 66.8 あった。原因疾患は、IPF の急性増悪：8 例・膠原病関連の間質性肺炎の急性増悪：2 例・原因不明の急速進行性間質性肺炎：2

例であった。広域抗生剤：12 例・ステロイドパルス：12 例・sivelestat sodium：11 例・免疫抑制剤：11 例が併用薬剤として使用された。挿管人工呼吸管理施行例は 4 例 (33.3%)・NPPV 施行例は 7 例 (58.3%) であった。 $\text{PaO}_2/\text{FiO}_2$ ratio は、PMX 療法施行後で (169.3 ± 66.8 vs 197.2 ± 78.2 , $p=0.0326$)、さらに 24 時間後では有意な改善が認められた (153.9 ± 62.1 vs 228.3 ± 73.8 , $p=0.0049$)。各種マーカーの推移では、KL-6・SP-D・SP-A はともに有意な変化は認められなかったが、SAA において PMX 療法施行 24 時間後で有意な低下が認められた (724.2 ± 704.9 vs 384.1 ± 400.8 , $p=0.0306$)。人工呼吸器離脱例は 6 例 (54.5%) で、1 ヶ月生存例は 5 例 (41.7%)、生存退院は 2 例 (16.7%) であった。生存例は、全例 IPF の急性増悪であった。

【考察】

近年、急速進行性の間質性肺炎・間質性肺炎の急性増悪に関して報告されているが、その予後は極めて不良である。ステロイドパルス療法、免疫抑制剤が使用されることが多いが有効性が確立されたものはない。近年、特発性間質性肺炎とくに IPF の急性増悪に対して PMX 療法が試みられており、有効性が報告されている。今回の検討では、間質性肺炎の急性増悪・急速進行性の間質性肺炎に対し酸素化能の改善が認められた。今後、PMX 療法の使用適応・使用法に関してさらなる検討が必要であると考えられる。